¡Hola, amigos!

第０８８号

（ＲとＮの Cádiz からの手紙）

皆さんこんにちは。これはＨＰというより、私達の近況をお知らせする長い手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は毎週、日本時間の金曜朝０４：００時から０８：００時の間に実施します。

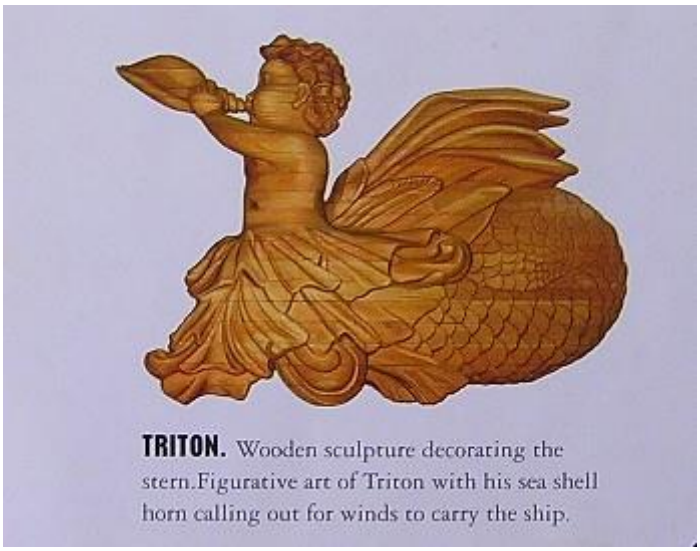
臨時休刊の場合は、なるべくその前の週にお知らせするつもりです。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のものは順次削除します。

では、今週号へどうぞ。　　２００５年１２月０２日　カァディスにてＲ ｙ Ｎ

☆今週号のトップへジャンプ

現在有効なバック・ナンバーは０８７号（１１月２５日）、０８６号（１１月１８日）０８５号（１１月１１日）の三週分です。各週のトップにあるボタンからどうぞ。



TRITON. Wooden sculpture decorating the stern.Figurative art of Triton with his sea shell horn calling out for winds to carry the ship.

＊今週号＊ No.087（2005年・第48週） １１月２５日更新

「肥満・喫煙」の巻

短い秋も終わり、先週末、首都以北では大雪になったようでしたが、カァディスではサムイー、と凍えるような日はまだありません。これまで、室内での最低気温は１７度。天気のいい日中は外のほうがずっと暖かい。勿論、暖房はマダまだです。

２８日月曜日、カナリー諸島は時ならぬ熱帯性低気圧に襲われて大騒ぎでした。１０月末頃から既にカナリー・トマトの欧州向け出荷時期に入っているので、この時期のカナリーは何年も経験していますが、１１月末の熱低なんて記憶にありません。

ソレニシテモ、熱低なんてのは襲来の何日も前から、来るぞ来るぞホーラ来た、というのが普通ですが、或る日、突然襲われてから、キター！ ですからね。

私たちが（如何に当てにならないかの確認の為に）欠かさず見ている天気予報でもそんな予告は聞いていません。この局だけが見せている天気図だってカナリーの西はカバーしてませんから、その直前に其処がどうなっていたか知る由もありません。

さて、最初の２字にぎょっとした方もおいでかもしれませんが、ご心配には及びません。日本で少々お肉がツキすぎといっても、この国で今、社会問題ともなっている肥満に較べればかわいいもんです。

この二つは、政治問題以外でよくテレビを賑わす話題です。これらはそもそもスペインの人の生活習慣そのものの問題で、テレビなどではしきりに健康的な食事やスポーツを奨励をしたり、喫煙の害を宣伝していますが、そんなことを言われてソウだ気をつけなきゃと思う人は、元々心配する必要もない人のようです。

スペインに来てから、日本では見たこともなかった超肥満体の人を良く見かけるのですが、最初に住んだ外国人の多い町では、その殆どが北欧の人のようでした。

しかし、カァディスに引っ越してから、人数はぐっと少ないとはいえ、どう見てもスペイン人という超肥満体の人たちも結構いることに気がつきました。

バスの乗車口は降車口に較べると狭いのが普通ですね。乗車口を通過できず降車口からでないと乗れない人がいます。当然、小型の乗用車にも乗れないでしょう。

スペインの裏町の歩道は異常に狭い所が結構あって、私達のような小柄の人間でも通りにくいと思う程ですから、そういう人は当然壁をこするようにして、なお且つ車道にはみ出します。前からそういう人が来たら反対側の歩道に逃げるしかありません。

昔の小錦のような軽快さ？は全くない見ているほうがつらくなるような歩き方。

そして、スーパーで、そういう人がモタれているカートの中は決まって肉類満杯。もうこうなると、健康的な食事やスポーツをするしない、の問題ではなく、肥満という病気又は家系ではないかと思えます。

テレビで社会問題として取り上げているのは、子供の肥満ですが、街で気がつくと、そういう子に限って何か甘いお菓子を食べながら歩いていることが多い。ヤッパリこれはもう食生活云々の話ではなく、ある種の心の病気としか思えません。

食生活といえば、スペインの朝の食事にも問題があるのでは、という気もします。前に紹介した私達のような朝食をとっている人はまず皆無でしょう。多くは朝は殆どナイに等しいのではないか？　だから１０時か１１時になると職場でも学校でも食事のための休憩があってボカディーヨをぱくつくことになるんです。

１１時ごろ中学・高校の近くを通ると全校生徒が近くの公園で、広場で、又は道路わきで、野菜など全く入っていないボカディーヨにかぶりついています。私達の眼には異常とも写る光景です。多分家庭ではマトモな朝食は食べてないんでしょう。

そういう食生活を何世代も続けていれば、病的な肥満になってしまう家系が出てきても不思議ではありません。そうなったら、ある一世代で食事に気を配っても、既に簡単に改善できる状況ではないですね。こうなるともはや遺伝子の問題というべきか？

また、日本の中高生に相当する子供達を良く見ると、タバコを吸っている子が実に多い。特に目立つのは中学生ぐらいの女生徒に多いこと。学校の玄関からタバコを吸いながら出てくるんだから、校内でも平然と吸っているに違いない。

（昔は盛業だったタバコ産業も下火になり、この工場は廃屋になっています）

今年の夏は異常に山火事が多発しました。それは大旱魃のためスペイン全土が乾燥しきっていたセイでもあり、自然発火というケースもあったのでしょうが、火元としてはタバコのポイ捨てが多かったのではないかという疑いを捨て切れません。

男性の歩きタバコは珍しくもありませんが、この国で目立つのは女性のソレが非常に多いこと。特に若い女性の喫煙がとても目立ちます。バス停などでも殆どチェーン・スモーカー的に吸っていて、バスが着いて乗車口に向かう間もまだ放さず、最終的に乗り込む寸前にその辺へポイ捨てです。（マナー？ソレってなに？）

どの町でもゴミ箱の数はとても多く１０数メーターおきにあるといってもいいくらいですが、焼け焦げて溶けてしまったプラスティックのゴミ箱を良く見かけます。多分火のついたままゴミ箱にポイ捨てした結果です。こんな風ですから山火事の一つや二つ起きて当たり前という気がします。

まあ、それでも、世の中全体としては、嫌煙の方向に動きつつあることは確かなのでしょう。この街にも元タバコ工場だったという立派な建物が２箇所もあります。

タバコはスペインとは切っても切れない因縁があります。何しろスペインが派遣したコロンブスの船隊が、梅毒と共に喫煙という悪しき習慣を持ち込んだそうですから。そして、さらには、あの名高いハバナ葉巻のもとになるタバコはカナリー原産種だったなどと言うくらいタバコには熱が入っています。

コロンブスが持ち帰った原種を、カナリーで改良してキューバに逆輸出したというのです。実際、カナリー産の葉巻は何種類か知っていますが、実にウマイ。

そういう国で喫煙の弊害を全国民に理解させ浸透させるのは容易な事ではないでしょう。一方ではモウ一つの策として最近タバコ税を大きく増税したらしい。それでもタバコ屋の店頭はどこも人があふれています。自販機というものがめったにないので紙巻一箱買うんでも店頭に並ばないといけないんです。自販機で買いなれた日本人ならそのめんどくささゆえに禁煙を決意する人がいても不思議ではないくらいです。

上の写真も元タバコ工場ですが、たまたま県議会や市庁舎などに近いというロケーションが幸いして、奇麗に改装され今では国際会議場兼展示場のようなものに生まれ変わっています。定年後、オイシイ第二の就職先を見つけたみたいなものカ。＊＊＊

「チョリィソ」の巻

チョリィソ chorizo このクセの強いソーセージについては前にピザのトッピングに使う話をしましたね。日本では***チョ***リソー、とチョの部分にアクセントを置いて呼んでいると思いますが、チョリィソの原産国スペインでの発音はチョ***リィ***ソ、とリィにアクセントがあります。ま、そんなことは味には関係ないことでチョリィソでもチョリソーでも、どうとでも呼んでください。日本のビア・ホールでチョ***リィ***ソくれ、なんていったら変な顔をされること請け合いですからね。

但し、日本のおおかたのチョリソーは本来のとはカナリ違うものだということは確かです。日本のビア・ホールなどのメニューにあるものは、ちょっぴりピリッと辛味が効いたソーセージですが、スペインのは、その辺のスーパーで普通に売っているものでもナカナカそんな生易しいものではありません。

大手のスーパーへ行くとコレだけで数十種類ずらーっと並んでいて、私達もまだほんの数種類を試しただけです。数種類目にとても気に入ったものに出会ったので其処で止まってしまっています。それが前にピザのトッピングにしていたものです。

だからコレはコウだとはっきりはとても言えませんが、とにかくこのソーセージの共通項は唐辛子とニンニクだと思います。その他どんな調味料、香辛料が使われているか、少量を食べてみただけでは到底見当がつきかねます。

しかも、成分表を見ても肝心のことは書いてなくて、エスペシアス especias ＝香辛料(複数)としか書いてありません。これじゃどういうスパイスをどういう風に混ぜているのかサッパリですね。更にメーカーによってもさまざまでしょう。

製品の形態もまたさまざま。真空パック入りの要冷蔵のもの、乾燥した常温保存のもの、同じ常温保存でも白い粉を吹いたもの、など色々です。サラミの種類もソフト・サラミから、上記同様粉を吹いたものまでカナリの種類がありますが、多分チョリィソのほうが多種多様だと思います。さて、今日の晩酌の友は？　そう、そのチョリィソの赤ワイン煮。作り方カンタン。勿論、赤のアテとしては文句なしの保証付。

日本に売っているチョリソーで果たして同じようなものが再現できるかどうか、全く自信がありません。なぜなら私達が知っている日本で一般に売られているチョリソーはあまりにおとなしい。そのくらいならいっそのことドライ・サラミを使ってみたほうが複雑な味になっておいしいかも知れません。とにかく、写真のものの処方を簡単に書いておきます。写真を見て、ウマソー、と思エル方はどうぞ市販の材料を色々工夫してお試しください。調味料はナシです。チョリーソそのものが調味料。

まず、チョリィソ１本約７０グラムを厚さ７～８ミリに小口切りにします。これをフライパンに並べて焦げないように低温でじっくり焼き上げます。要するに油を全部搾り出してしまうんです。カリカリ・ベーコンの要領です。もう油は出ないというところまで焼き上げたら、キッチン・ペーパーに並べて更に余分の油を取ります。タマネギたて二つ割を５～６ミリにスライスして、少量のオリーブ油を小鍋に敷き、中火で炒めます。タマネギが透明になったら焼いてあったチョリィソを加え赤ワインをひたひた迄入れて弱火でじっくり煮込みます。この処方をスペインの人に見せたら叱られるでしょうね、油を出し切ってしまうなんて、と。ホントは丸ごとですから。＊＊＊

「Götheborg」の巻

これ、なんと読みますか？　世界地図でスウェーデンの南西部を見ると Göteborg という綴りが見つかります。地図によっては Gothenburg という英語綴りになっているかもしれません。両方ともスウェーデンの港町の名前です。

この項の題の綴りは、どちらにも似ていますが、どちらでもありませんね。これは先日カァディスに入港したスウェーデンの帆船の名前です。これをどう読むのか、実は知りません。

地名の Göteborg は原音ではイェーテボリ、又はイョーテボリと言うらしい。

日本語表記だけの地図では、ヨーテボリなんてなってたのもあったと思います。

Gothenburg はその英語表記で、発音はゴーテンバーグ、又はガーテンバーグぐらいでしょう。船乗りの世界では大体そんな風に言っていました。

この港の少し南のヘルシンボルグ Helsingborg（多分ここも原語ではヘルシンボリとでも言うんでしょう）をはじめデンマーク東岸や東独の港などに行った時この港の前面のカテガット海峡 Kattegat Strait は何度も通りましたが霧のかかり易いところで往生させられました。

さて、船名の Götheborg はどう読んだらいいか？これは地名の Göteborg の古い綴りだそうですから発音も多分同じなのでしょう。この船は１９日からカァディス港に停泊し、２８日昼過ぎ次の寄港地ブラジルのレシフェ向け出港してゆきました。

この船のカァディス停泊中は連日色々な行事があって町はちょっとしたスウェーデン・フェアーのようになっていました。この船は１８世紀にスウェーデンと中国との間の貿易に活躍した船の１：１スケールの復元船なのだそうです。当然、見かけは古色蒼然の木造帆船ですが、中身は近代的な装備でギッシリらしい。

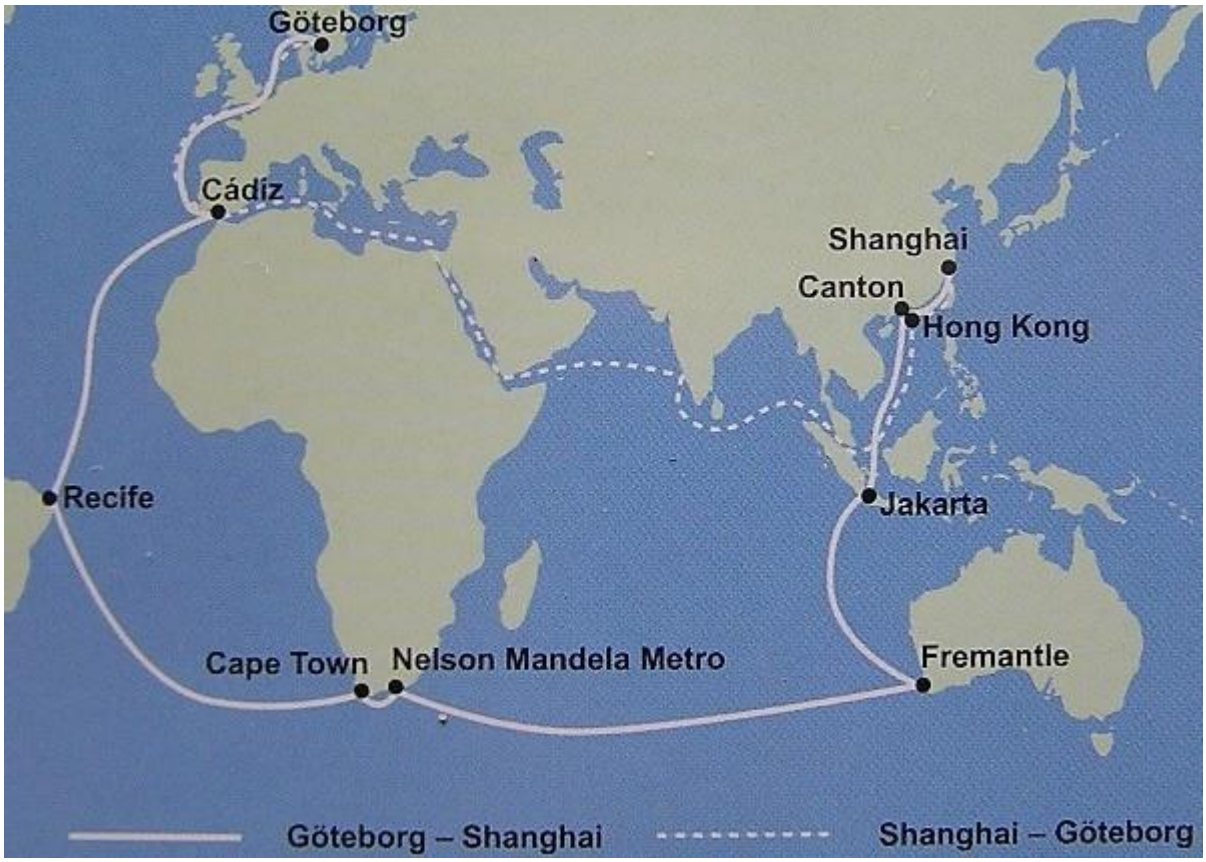
その当時はイースト・インディアマン East Indiaman（東インド貿易船）と呼ばれた型で全長５８．５メーター、幅１１メーターの堂々たる帆船です。

ほらね、船尾を見ると良く似た二つの綴りが見えますね。上が船名、下が船籍港名です。言うなれば、船名・横濱丸、船籍港・横浜、みたいなもんでしょう。

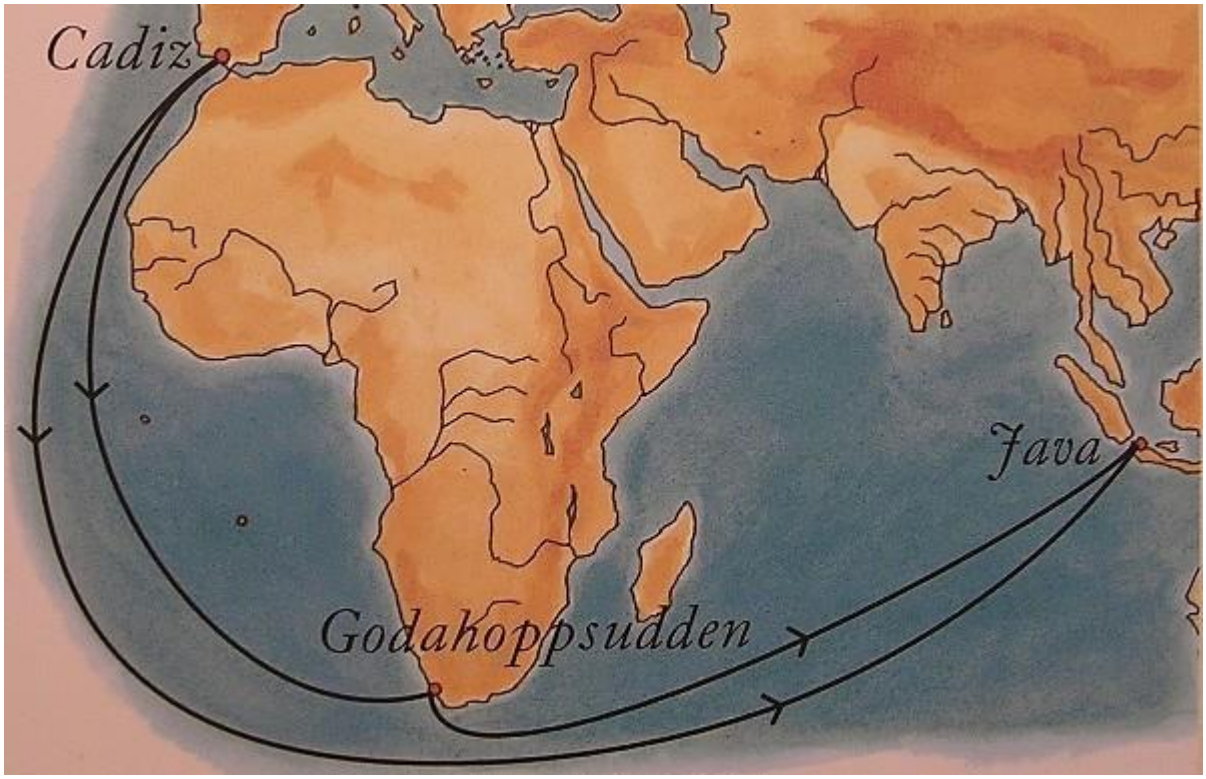
この当時の帆船は木造が当たり前なんですが、この復元船の中身は現代の造船技術の粋を集めて造られているようです。しかし、目に見えるところは全て忠実に復元されているそうで、そんなハイテクが水面下に隠れているようには見えません。

船尾にバルコニーがある船なんて始めて見ました。イイですねー。バルコニーの上の彫刻はギリシャ神話に出てくる海神ポセイドン(英名 Neptune) の息子トリトン(英名 Triton)で、ほら貝を吹いて風を呼ぶのです。船乗りは、口笛を吹くと時化を呼ぶと嫌ったモノですが、帆船では時化よりもむしろ無風が一番イヤなのでしょう。

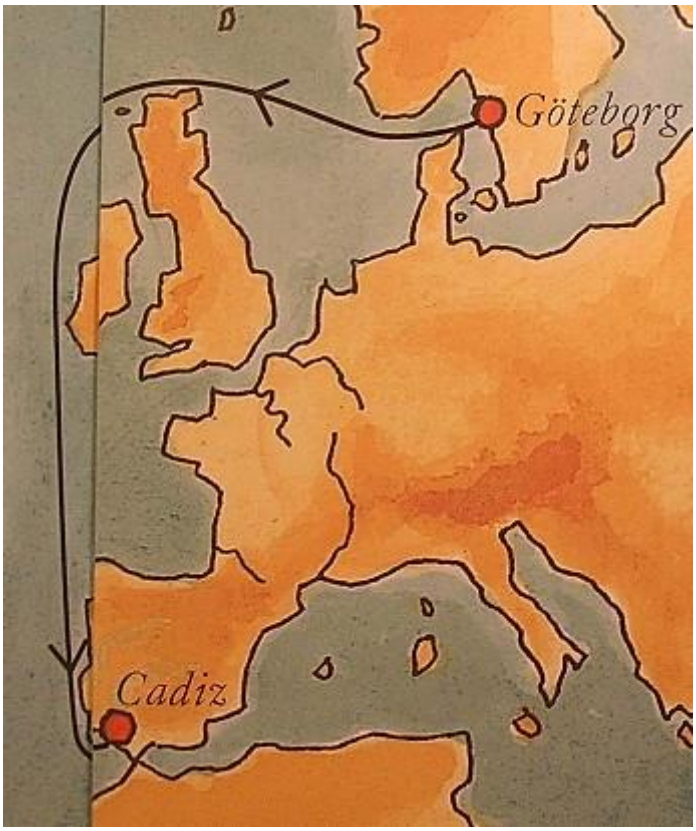
驚いたことに舷門で乗船料一人５ユーロ也を請求されました。この手の親善航海の船が見学料を取るというケースは初めての経験です。練習生だった頃を含めて内外４隻の帆船であちこちの港での一般公開の裏方を務めましたが、料金を取るという発想はコレまで考えも及びませんでした。確かに帆船の維持費は膨大で、そのために各国の民間ベースの帆船の運営は四苦八苦です。それにしてもネー・・・。

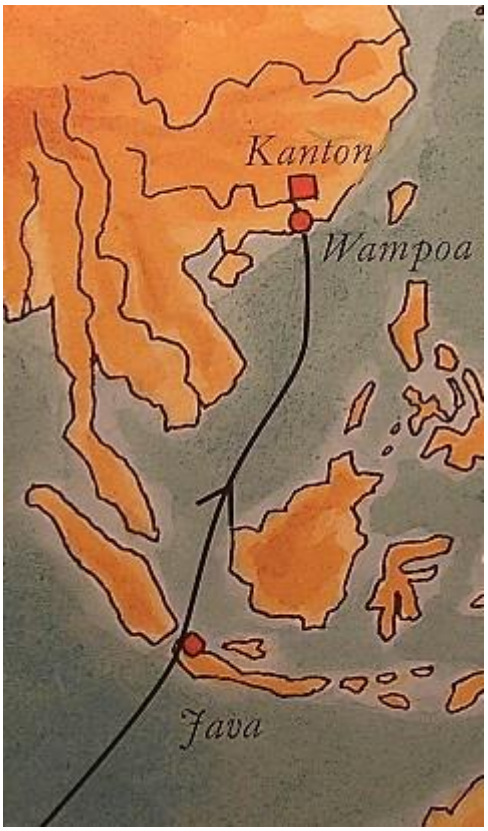


上の図は今回の親善航海の往きと帰りの予定航路です。各寄港地はこの航海でのもので１８世紀当時のとはかなり違います。当時の寄港地はもっとずっと少なかった。



例えばこんな具合。カァディス以後はジャワまで直航ということが多かったらしい。





イェーテボリからカァディスまではスコットランド、アイルランドを大きく迂回していますね。随分遠回りのようですが、この当時の帆船は風上には殆ど走れなくて、順風のみが頼りでした。だから概ね逆風・逆潮になるイギリス海峡を通る最短コースを取ることは出来なかったのです。

また、寄港地が極端に少なかったわけは私掠船 privateer に遭遇する危険を最小限にしようという策でもありました。当時はイギリスを始め仏・露・蘭などの各国に、正規の海軍には属さないが国家が認可して他国の商船や軍艦にまで攻撃を加える、というある種の海賊船が跳梁していたのです。私掠船、言わば公認の海賊です。

どこにも寄港しなければ、広い海上で出会い頭の遭遇をする確率は低いですが、寄港地が多ければ多いほどそういう危険な私掠船に情報を提供し、港周辺での襲撃の機会を与えることになる、だから出来るだけ寄港地は少ないほうがいいわけです。

わずかに喜望峰の北、テーブル・ベイ Table Bay＝現在のケープ・タウンとスンダ海峡に面したジャワ島西端で清水などの補給をしたらしい。

この船もそういう私掠船に対抗するため商船のクセに大砲を積んで自衛策をとっていたんですね。当時の商船はこういう自衛のための武装は必須だったわけです。

パンフレットによると、この船の船主は３７隻もの大船隊を保有する会社だったそうです。当時の東アジアは既にイギリスやオランダ、スペインなどに食い荒らされていて、わずかに中国だけが貿易の対象になりえたらしい。しかし、貿易とは言うものの実態は中国物産の輸入オンリー、殆ど一方通行だったといいます。

この航路に就航する船は、本国から材木・鉄などをカァディスに運び、そこで全ての積荷を売り払い、当時中国が外国通貨として唯一認めていたピアストル銀貨に換えたのだそうです。そして、カァディス以後は途中での補給は別として、殆どの場合中国のカントン(Kanton＝Canton＝現在の広州）に直航し、其処から茶、陶磁器、絹織物薬草、香辛料などを積んで、まっしぐらにホーム・ポートを目指したのです。

これらの輸入品のうち、本国スウェーデンで消費される量はごく一部で、その殆どは競売に掛けて欧州各国に買い取られ、大いなる利益をあげたのだといいます。

今回の航海の目的は、この船が活躍した頃の親密だった両国の関係を記念して友好親善をはかり、あわせて、当時、盛んだった中国との貿易をもう一度再現したい狙いのようです。今度は買い一方ではなくお得意の精密機械や自動車も売りたいでしょう。

昔も今も中国の底力はスゴイですねー。だからスリスリの国も多い。

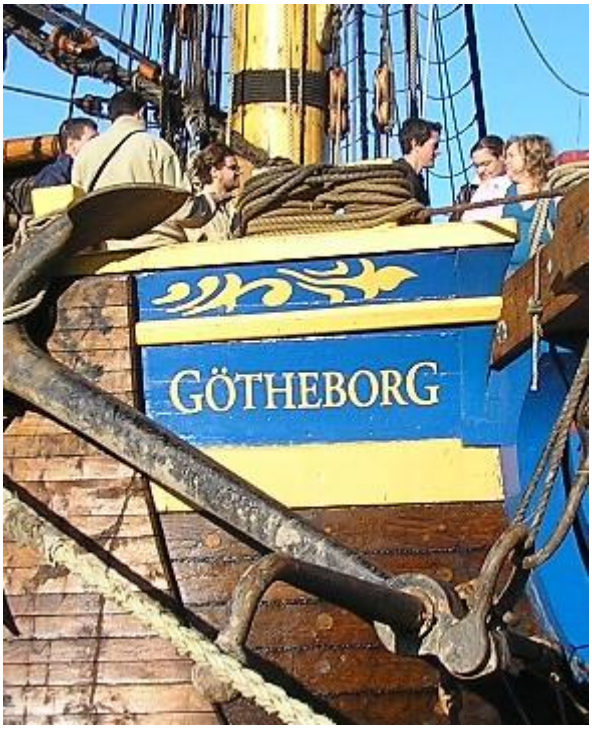
１８世紀、世界では何が起きていたか、アメリカ合衆国の独立が１７７６年、フランス革命が１７８９年。日本は？ 鎖国政策でジトっとウチにこもってましたねー！

街には市庁発行のポスターが貼られ、市をあげての歓迎の様子。港隣接の公園にはこの航海の協賛者であるスウェーデンの大手企業のパビリオンがずらり。

普段は万国旗が飾られている港入り口の噴水のあるロータリー、プラサ・セビージャの周りはスウェーデン国旗一色になっていました。

快晴の空をバックにセール・ドリルを披露する Götheborg。

現在、世界各国にある練習帆船のスマートさはないけれど、どの角度から見ても絵になる船。それが現実に貿易に従事していた船の存在感でしょうか？



船首の船名板とフィギュア・ヘッド。船名板の色合いはいかにもスウェーデン。フィギュア・ヘッドとは船首像のことで、一般に知られているものの多くは女神又は女性像です。この船のはそんなヤワなものではなく、この通り百獣の王・ライオン。その当時は常に海賊の脅威にさらされていて、女神を頂いての神頼みより、もっと実際的な、負けるもんか、という勇気が欲しかったのでしょう。

へんぽんと翻るメインマスト上の船名旗。

どうですか？ この質感。此処に写っているものの殆どは天然素材です。金属は錨と錨鎖ぐらい。滑車もデッドアイ(三つ目滑車＝ロープの端末を止めるもの)もすべて木製。船体も目に見える部分は全部木製、しかも水線上はニス塗りです。

船体を良く見てください。現代の船にはない下ぶくれの形、これをタンブル・ホーム tumblehome と言います。平面がないほうがより強固な船体になるんですね。

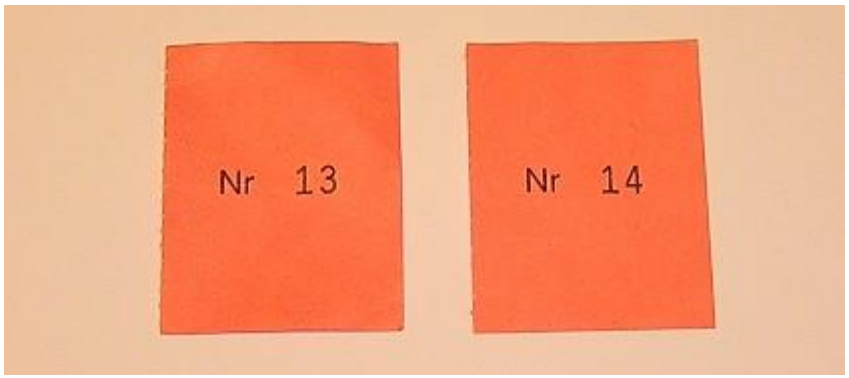
鉄の船体は海水の塩分でさびるから木製の方がいいだろう、と考える方がいるかも知れませんがソレは大きな間違いで、現在の良質のペイントを適切に塗装すれば鋼鉄の船の維持はそれほど難しくはないのです。しかし、この船のメインテときたら！！

気が遠くなるような労力と資金と時間が必要です。

メインマストを下から見上げたところ。こんな太い木製のマストは見たことがありませんでした。今までに知っている帆船は、ロワー・マスト(lower mast＝下檣)は鋼製でわずかにトップマスト(topmast＝上部マスト)だけが木製という程度でした。

前に、帆船の維持には膨大な費用が掛かるといいましたが、それは鋼鉄の船体や金属製の艤装品を使った近代帆船のことを言ったまでで、この船のような殆ど全てが木製の船の維持費は膨大なという形容では足りません。とにかく巨額の維持費が必要であることは確かで、到底民間で維持できるような船ではありません。この船では有形の利益を上げることなどハナッからない話、採算度外視の国家的事業でなきゃ出来ない相談です。この船の運営はスウェーデンの海事博物館とスウェーデン協会。目的はスウェーデン文化の紹介・普及・宣伝。「？海国ニッポン？」はどうした！！

メインマスト基部。ごっついマストですね。１８本ものパーツを接着剤は一切使わず組合わせているのだそうです。そしてロープ、ロープ、またロープ。



ところで、この番号札なんだと思いますか？　これ、私達が払った５ユーロの見学料の受領書、というか乗船券。なんだかインチキ臭いほど安直ですね。この船のスポンサーにはボルボなどスウェーデンの大企業が名を連ねていますが、その一つに大手銀行がありました。ハハンやっぱり。こんな船の見学料を取るという発想は銀行屋殿くらいでなけりゃできっこねーやナ。少なくとも船乗りの考えることじゃナイ。＊＊＊